

B C 2 0 0 0 年紀前半 — 東南アジア大陸における一つの画期 — 西村 昌也

更新世末から完新世前半にかけて、東南アジア大陸部全体を特徴づけるホアビニアン礫石器群が、いつ終末したかという問題は土器、磨製石器を基本遺物組成とする新石器時代がいつ始まるかという問題の裏返しでもある。かつて、北タイのデータなどから、BC5-6000年紀という予想以上に古い年代が想定されたこともあったが、近年のタイ、マレーシア、南ヴェトナムでのホアビニアン遺跡の調査の結果はそうした古い年代想定を不可能にし、BC3000年紀までホアビニアンが存続したようである。ただし、北部ヴェトナムでは最大海進期（BC5000年紀）に重なる Da But 貝塚遺跡群を始め、BC5000-3000年紀に属する前期新石器段階の遺跡が相次いで報告されている。北部ヴェトナムは広西・広東省等と並行して、大陸部では最も早く、BC5000年紀には、ホアビニアン礫石器群から前期新石器段階へ移行したようである。

BC2000年紀前半になると、定住農耕を予想させる大型の重層マウンド遺跡（例：Khok Phanom Di, Ban Chiang）等を含む後期新石器段階の遺跡が出現し、バラエティーに富む遺物や集団墓が見られるようになる。但し、この後期新石器段階の遺跡群は、少なくともタイ、マレーシアでは、北部ヴェトナムのような前期新石器段階を経ずに、かなり突発的に出現した可能性が高い。従って、定住性の高い農耕の出現期と考えられるBC2000年紀前半の変容過程を理解するにあたって、北部ヴェトナムは暫時的、自律的な発展と理解できる一方、タイやマレーシアでは、むしろ他地域からの文化流入が変容の主因を占める可能性が高い。大陸部からマレー半島にかけての後期新石器段階の出現は、最近 Bellwood (1993: Asian Perspective No. 32-1) 等が論じているように、島嶼部東南アジアで新石器出現過程とオーストロネシア語族起源問題が絡むのと同じレベルで、民族形成問題の鍵を握る重要な画期といえよう。

特別講演要旨

Thai Study in Thailand: A Reconsideration ——— Pornpen Hantrakool

This talk simply aims at a brief remark on some aspects concerning condition, idea and methodology which are underlying the study of Thai studies in Thailand at present.

The talk will center at a concise history of the study of Thai studies, a short report on its present situation and stipulations for advancing Thai studies, as an intrinsic field of knowledge for the Thai, to seeking a new direction of more varieties of idea and methodology, as well as of much broader objectives in the study itself.

What the speaker is going to comment or stipulate here is mainly based on the speaker's assumption that the body of the Thai studies in Thailand always comes from abroad, otherwise is under foreign influence like many

other things else. Also, the adaptation of this "imported" knowledge, which is not much different from other "foreign goods," lacks solid harmonized continuity and strong internal criticism. This, and some more other factors, seem to be unable to help create originality, development and real value for the Thai study scholarship in modern Thailand, except only a few.

シンポジウム<東南アジア史における先住民と移住民>報告要旨

趣旨説明 _____ 玉置 泰明

本テーマの背景は「国際先住民年」である。しかし東南アジアにおける「先住民」はアメリカ大陸や豪大陸の場合のように自明の存在ではない。現在の東南アジア各国でも、誰を先住民とするかについて明確な合意（政府のだけではなく、研究者の間でも）が存在するとは言いがたい。さらに、歴史的に見れば東南アジアの各民族は、ある時点では移住民として、またべつの時点では先住民として存在してきたと言えるだろう。実体あるいは概念としての特定の「民族」自体が、諸集団の移住や離合集散の繰り返しの中で形成されてきたと言う方がいいかも知れない。それゆえ我々が「東南アジア史における先住民」と言う場合、「国際先住民年」が対象とするような現代的意味での「先住民」だけではなく、歴史上の特定の時点での「先住民」をも対象すべきであろう。様々な地域、様々な時点での先住民—移住民関係こそが、東南アジア史のダイナミズムを作ってきたという言い方も可能であろう。

例えばフィリピンの場合、スペイン人が到来した時点での「インディオ」すなわちすべての土着民族を「先住民」と考えることができる。ずっと遡って、先マレー系民族（ネグリート）が住んでいた群島にマレー系諸民族がやってきた時の関係も、先住民と移住民という図式でとらえることが可能である。それは諸集団が群島の各地に移動して定着していく過程の中でも繰り返しあったことであり、マレー系諸民族同士の関係についても言える、下っては、キリスト教徒が南部フィリピンに移住した際の「先住」のムスリム諸民族との関係も見落とせない。

また、「先住民」は「先住少数民族」のみならず「先住多数民族」をもふくむ。東南アジア史ではとくに、華僑・華人と先住諸民族の関係が重要なことは言うまでもない。

こうした様々なレベルでの先住民—移住民関係を「共生と摩擦」という視点からとりあげることによって、東南アジア史の新しい側面に光を当てることができれば幸いである。

ヨーロッパ人とインディゴス 生田 遊

コロンブスに始まるヨーロッパ人のインディアス、すなわち新大陸進出は、厳しい、